人との関わりの中で日本語力を高めるための指導法

── 魅力ある学校づくり ──

前インディアナ日本語学校（補習授業校）教頭
大分県日田市立日隈小学校　教頭　長　野　欣　也

キーワード：日本語力，されどあいさつ，学部間交流，学級ピクニック，面接体験

１．はじめに

アメリカ合衆国の中西部に位置するインディアナ州のほぼ中央にインディアナ補習授業校がある。「インディアナ」の名称は「インディアンの住む村」の意味があるが，インディアンは南部へと移り住み，インディアナ州には在住していない。インディアナ州には，日系企業約200社があり，多くは自動車関連会社が進出してきている。駐在員の子女320名が各方面から本校に週に１度土曜日に登校してくる。州内には，本校を含み５校の補習授業校が存在する。本校は，南北から約１時間半かけて登校する児童生徒がいる。児童生徒数の多い４地域は，スクールバスで通学してくる。そのため，冬場の登校は，積雪や道路凍結で困難となり，年に１～２回休校にせざるをえない状況にある。

本校は，昭和56年１月にインディアナパデュー大学インディアナポリス校を借用し，日本語学校を開設した。当初は，児童生徒数10名・教職員３名でスタートした。その後，今のオーチャード校（私立幼・小・中一貫校）を借用校とし，徐々に中学部・高等部を設立し，現在では，幼・小・中・高等部，320名の児童生徒と30名の教職員が年間42日間の授業日で日本語力の向上を目指し頑張っている。

また，学校運営にあたっては，州内の７地区より企業代表７名と顧問（会計・弁護士）それに私（校長の立場）で「運営委員会」を月に１度開催し，学校運営上の諸問題・学校行事の企画運営・財政面について協議している。

課題として児童生徒は，滞在年数の長い者やアメリカ生まれの者もおり，同じ学級での日本語力の差が広がっている。国際結婚の家庭が全体の10％をしめている。将来帰国後の日本の教育環境や社会に順応できるように，本校も「日本語力向上」に重点を置き，実践してきた。

２．まずは「あいさつ」から

児童生徒は，月曜日から金曜日まで，それぞれ現地の学校に通っている。慣れない環境の中，英語による各教科の授業を受け，また，現地校・日本語学校のそれぞれの宿題を仕上げて，土曜日登校してくる。しかも，１時間半もの通学時間をかけて来る児童生徒もいる。このような中でも，子ども達は日本語学校を楽しみに通って来ている。私も，週１度の子ども達との出会いを楽しみに，朝玄関前で立ってあいさつをしてきた。たかが「あいさつ」であるが，コミュニケーションづくりの基本である「あいさつ」をしっかりと定着させたいと努めた。

マイナス15度という厳寒の日でも，子どもたちの明るい笑顔のあいさつに心が温まる思いで迎えてきた。

３．日本語力を高める指導法

(1) 指導時間の確保・工夫

本校の授業日数は，年間42日間。学校行事（運動会・卒園卒業式）を除くと40日間。小学部１年の国語を日本の学校と比較してみると，日本は272時間，本校は120時間。圧倒的な授業時数の不足である。この時間数の中で，教科書の年間指導内容を軽重を考えながら子ども達が意欲的に取り組む指導法を先生方は実践している。週に１度の放課後２時間を確保し，先生方の授業研修に当てている。幼稚部・小学部低学年部・小学部高学年部・中学部・高

等部に分かれ，それぞれテーマを決め研修を行っている。授業の見合いや子どもの実態把握，指導法の改善に力を注いでいる。いくつか例を述べる。

◆幼稚部・・テーマ「本好きな子どもにするために」を掲げ，図書指導や中高生による紙芝居の読み聞かせ，保護者や校長による読み聞かせ，物語・童話の場面制作（赤ずきんちゃんとオオカミ）等を行い子ども達に本の魅力を感じてもらう取り組みが行われた。

高校生による幼稚園児との紙芝居交流（学部間交流）

◆小学部低学年・・テーマ「輝け音読」を掲げ，朝の５分に声だし（早口言葉・詩の一斉読み等）をしたり，音読発表会（保護者参観）を行いながら「音読が好きになり，すらすらと心を込めて音読できることを目指した。

◆全校で取り組んだ「きらりタイム」

授業の開始時に，集中して授業に取り組めるようウォーミングアップとして３～５分の「キラリタイム」を設けた。内容を紹介する。

【幼稚部】・朝の会・・日直当番の自己紹介（みんなの前で話す訓練・友達のことを知ることができた）

【小学部低学年】・朝の会・・言葉遊び，わらべ歌　・国語音読　・算数計算ミニドリル・計算クイズ

【小学部高学年】・朝の会・・今日の一言，月毎に詩の朗読，言葉の体操（気持ちが落ち着き集中力ができた）

・国語・・小テスト，慣用句調べ発表　・算数・・小テスト

【中学部】・国語・・１分間スピーチ，漢字小テスト（生徒が相互に学ぶ機会ができた）

・数学・・前時の復習

【高等部】・国語・・漢字・言語事項小テスト　・数学・・前時の復習，まとめ

・英語・・単語・文法小テスト

◆漢字シート小学部全員配布

国語の学習で，子ども達にとって課題となっているのが，「漢字」の習得である。海外生活が長くなってくると，生活環境の中で自然と学ぶはずの「目から入る日本の文字」が入らず，努力しない限りどんどん漢字（特に書く力）の習得が困難になってくる。本校では６年前から漢字検定を始め，漢字への興味を持たせることを行ってきた。小学部２年より高等部３年まで希望者であったが，年２度の漢字検定試験を実施した。以前は，高等部の科目の中に「漢字検定」があった。

また，身近に「漢字」を見る場面を作ろうと，私が各学年毎の「漢字配列表」を基に，漢字シート（手書き）を作り，ラミネートをかけて，小学部全員190名に毎年配布している。普段の授業で，ノートにはさみ，下敷き代わりにしながら，必要に応じて活用してもらった。高学年部では，授業の初めに漢字シートを使い，読みの学習を行っていた。

(2) 魅力ある学校づくり

◆学級ピクニック

児童生徒へのアンケートを取ると，「遠足（修学旅行）に行きたい」「学習発表会がしたい」等の要望が出てくる。どれも，授業日数を考えると，1日とって新たな行事を実施する事は難しい。そこで考え出したことが，「学級ピクニック」である。1時間と昼食の時間をセットし，各学年毎に担任が子ども達と計画を立て，学校の敷地内で実施するものである。目的は，児童生徒間の仲間づくりである。

【幼稚部】「昔の遊び体験」・・・「かごめかごめ」や「花いちもんめ」

【小学部】「学校探検」「森探検」「漢字ゲーム」「ドッジボール大会」「スケッチ大会」「フットベースボール大会」

【中学部】「スケッチ大会」「ドッジボール大会（異学年交流）」

【高等部】「レクリェーション（交流）」

小学部低学年の「森探検」では，校舎裏の森（敷地内にある）を探検し，五感を使って「春」を感じたことを作文に書く取り組みを行った。小学部高学年や中学部では，「校内スケッチ大会」を行い，普段できない絵画を味わった。友だちの長所を発見する良い機会となった。わずかな時間であったが外で友だちと輪になっての弁当も格別のようで，毎年子ども達は楽しみにしていた。また保護者からも継続希望の意見が多かった。

◆中・高生による面接体験

コミュニケーション能力を高めるため，数年前から中学部3年生から高等部3年生全員を対象に，「面接体験」を取り入れている。生徒数役60名を6グループに分け3会場にて運営委員・校長が面接官となり，様々な問をする。「将来の夢・それに向けて努力していること」「アメリカ人と日本人の違い・長所」「尊敬する人」「国際人とは」「今，夢中になって取り組んでいること」「補習授業校は自分にとってどんな存在か」等の質問に，生徒達はしっかり答えていた。

生徒の答え・面接官の感想の一部を紹介する。

【将来の夢】・医師　・看護師　・小学校の先生　・キャビンアテンダント　・建築士　・パイロット
・英語を使った仕事　・エンジニア　・天文学者　・薬剤師　・保育士

【国際人とは】・異文化や言動を受け入れる心の広い人　・地域を理解し対応できる人　・前向きな人
・誰に対しても笑顔で接する人　・軟らかい頭を持った人

【日本語学校の存在】・心が休まるところ　・心を開くことができるところ　・日本語能力の向上
・同年代と話すことができる　・数学を日本語で習うとより理解が進む
・先生の色々なアドバイスがもらえる

【面接官の感想】・礼儀正しく印象が良かった。模擬面接という面以外にプレゼンテーション，自己表現訓練の場として場数を踏むことが生徒にとって良いと感じた。
・昨年の面接に比べ，すべての生徒が大きく成長していることを強く感じた。自己をはっきり表現できる力は，アメリカ生活を経験した生徒の特筆すべき点だと思う。今後の成長が楽しみである。
・高校生の意見は皆しっかりしていて，面接でなければ，こっちからも意見して論議したいくらいだった。

4．現地交流教育

日本語学校のある保護者より，「現地の中学校で，日本の文化である『書道』の授業をしてもらいたい」との依頼があった。私自身現地交流教育の実践を・・と考えていたので，良い機会と思い承諾した。

訪問した2つの中学校は，カリキュラムの中に日本語教育があり20名近くの受講生がいた。日米の交流というこ

ともあり，「友」とし，45分の授業を行った。初めて筆を手にする生徒たちばかりであったが，日本への強い興味もあり，真剣に「書」（日本の文化）に取り組んでいた。1時間と短い中であったが，生徒も満足の様子で，作品を大切に持ち帰った。本校の生徒（日本語保持のため）も2名この学級の通っている。

カーメル中学校の日本語教室の生徒たち

5．インディ5の取り組み

インディアナ州には本校を含め5校の補習授業校がある。赴任した年に5校の連絡協議会「インディ5」を設立した。年2回の協議会を開催し，相互の実践交流や情報交換を行った。出席は，各校校長と運営委員長で全体会・分科会を行った。本校以外は，20名～60名程度の規模で，本校とは実態が異なっているが，講師確保の件や指導力向上など共通の課題を協議し，学校運営に生かした。

6．終わりに

日本語補習授業校は，海外の異文化・異なる生活環境の中で必死に現地校と補習授業校の両立で頑張っている児童生徒達，その生徒達に週1度しかない貴重な授業日に照準を合わせレベルの高い学習をと授業準備に一生懸命取り組む講師達，生徒の送り迎え・弁当の準備等で精神的に支える保護者，補習授業校の運営面・経営面の諸問題に精力的に取り組む運営委員，日系企業の経済的援助，文部科学省の援助等多くの方々の関わりの中で26年間の伝統を守ってきていることを改めて感じた。3年間の間，最大の課題は，講師の安定確保であった。希望者を面接し，事前研修や代講経験を通じて採用し，教壇に立ってもらう流れで進めているが，意欲があって，教員経験がある者でも就労ビザがとれずに採用できない講師もいる。特に高等部の講師確保は深刻で，1年間の勤務が原則であるが，現実は3ヶ月や半年等のつぎはぎの講師もいて，継続した学習指導ができにくい現状がある。

3年目の後半，講師不足で高等部の存続が危ぶまれたが，保護者・運営委員の積極的な協力もあって講師の確保ができ卒業式には存続の報告ができた。しかし，この講師不足の問題は今後も続くことが予想される。講師の問題が解消されない限り，児童生徒の受け入れ数や学習内容・学部・教科科目等の制限が余儀なくされ，補習授業校事態の存続にも係わる事につながる。文部科学省・外務省にも就労ビザの取得への働きかけを是非お願いしたい。